

熊本洋学校後の近代学校教育(Ⅰ)

藤本 誠

一 広取学校の「広く知識を世界に取らんと欲す」小楠流実学教育

一八七六(明治九)年七月、熊本洋学校は廃校となり、実学党の人々による保存経営が企図されたが実現しなかった。¹⁾『熊本県教育史・上巻』(昭和六年一月一〇日発行、熊本県教育会)には、

「洋学校廃校後野々口(注・元洋学校幹事・為志)は熊本に語学教育機関の廃絶することを歎き嘉悦氏房、山田武甫等と協議し、従来の校舎を借り受け、卒業生を教師として之を継続せんと企てたけれども、敬神党の変(注・神風連の乱)に次いで明治十年の役(注・西南戦争)あり、遂に実現に至らずして止んだ」⁴⁾

と記されている。

西南戦争で焦土と化した熊本城下に、まだ煙火燻る一八七七(明治一〇)年一〇月、「嘉悦氏房の自邸に開かれた英学塾がその起源」⁵⁾となって、洋学校の卒業生中在郷者で最も光彩を放っていた福島綱雄⁶⁾を教師として洋学研究が開始された。洋学志望者が漸次集り、広取学校結社が組織され、野々口為志、嘉悦氏房、林秀謙が設立推進の中心となった。広取学校は明治十一年九月に認可され、同一〇月二二日嘉悦氏房邸の屋敷内(託麻郡本山村・現熊本市本山町)で開校式を挙げている。⁷⁾

校名の広取学校の由来は、開校式の野々口の祝辞で明らかである。「…寧ろ此ノ廃絶ノ校ヲ興シ広ク後生ノ開明ヲ謀ルニ如カズト。…此ノ校ニ坐シ、以テ語学ヲ講明シ、以テ広く知識ヲ世界ニ取ラント欲ス。是レ広取学校ノ名称ヲ生ズル所以ナリ。…」⁸⁾と

ある。「廃絶ノ校」とは熊本洋学校のことである。広取学校の「教則」⁽⁹⁾によれば、三年制で二学期制をとっており、それぞれ午前課と午後課に分かれ、「体裁は週間時数における総合学科の併行履修という形でなく、学期毎の段階的な積み上げ方式をとっていた」⁽¹⁰⁾ことから、洋学校の教育課程にそのままならつたものである。学科目は、英語読本の第一、三課程、習字、書綴、英文典中等、地理、歴史、図学、算術、代数、幾何、窮理、化学、星学、地質学、人文学、文学などであり、正課の外に必ず一週一回を務め三年間通さねばならない課外が四科目設けられていた。和・英それぞれの話文、書取、作文と、和漢書の素読・講義である。この点が洋学校との大きな相違であつて、この「課外授業における和漢書の素読、講義において、まさしく、訓育、徳育がおこなわれ、倫理観、道徳観、宗教観の育成がなされ」、⁽¹¹⁾校長の嘉悦が担当した。謂わば、「経世」に対する「嘉悦の小楠流実学」⁽¹²⁾であつたと言つてよい。

広取学校で学んだのは、林田亀太郎、竹崎隼雄、竹崎元彦、紫藤章、高木第四郎らで、九州学院初代院長・遠山参良も一年間ほど学んだ。後日の教育座談会で、高木が「広取学校に就て」⁽¹³⁾回想しているが、その中に遠山の名前が特別に挙げられている。広取学校の中でも、遠山は光彩を放つていたのであろう。

「…それが明治拾一年の一月から拾三年の四月頃までそこで学びましたが、その後外に感ずる處⁽¹⁴⁾があつてその学校を出ましたが、なんでも拾四五年頃迄続きました様であります。だん、おそく出た人に今の九州學院長遠山参良氏等があり、この人は私共よりおそい人でありますが、その拾一年から拾三年の間は前申しあげました様な事であつて、福島先生が数学や英語等一人で教へて居られ、上級生が僅かに補助教授した様な事でありました。一方に教科目の方面は主として英語で数学をやつて居つた様であります。五六十人居りましたが、大学に入つて高等教育をうけた人は十四五人位あつたと思ひます。さういふ風な事で廣取學校といふものが起りましたが拾五年頃には止んだ様であります。…」

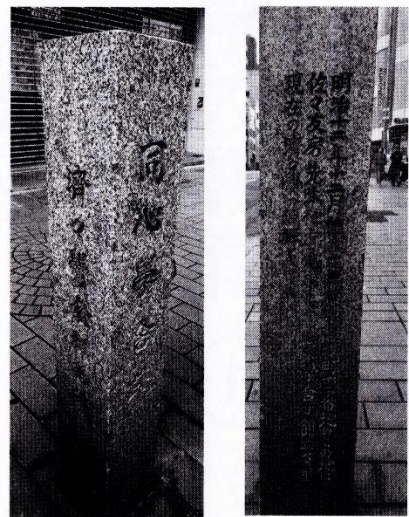
遠山参良は京都同志社を辞めた後、一八七九(明治一二)年九月、数え年一四歳で私立広取学校に入学し、翌明治一三年九月には鏡英学校(私学岡田英学校)に入学しているので、広取学校では一年間学んだことになる。広取学校は洋学校の教育課程を引き継いでいたが、洋学校から熊本バンドの英傑たちに従つて同志社で学んだ遠山にとっては、物足りな

いところがあつたのではないか。広取学校の実学教育の内実は、熊本バンドを育んだジェーンズの教育理念とは異質の小楠流実学であつた。

二 国権主義・濟々鬻の設立、「濟々鬻」は元「九州学院」だつた

一八七五（明治八）年に開設された植木学校¹⁵を源流とする自由民権運動が高揚した明治前期には、熊本では民権派が国権派を凌駕していた。しかし、一八七七（明治一〇）年の西南戦争で熊本隊を編成し西郷軍に従軍した友房が、一八七九（明治一二）年一月二四日出獄し帰熊すると、学校党を中心にした反民権派が勢力を盛り返した。

学校党勢力の再結集を図り、明治一三年二月二六日、熊本区高田原相撲町三三番地に「同心学舎¹⁶」の設立が認可されると、一四年九月一日に国権派の新党紫溟会が結成された。¹⁷一五年二月一日、紀元節の日には紫溟会の教育機関として、同心学舎は私立「濟々鬻¹⁸」と改称され、開校式が執り行なわれた。¹⁹天皇中心主義、国家主義の精神の下、「三綱領」を掲げ、「爾来新年・紀元・天長三大節及神武天皇祭」には、聖影を掲げ国旗を翻へし、演説・祝文等あり、永く以て恒例とす¹⁸ることを謳つた。皇漢学を中心



濟々鬻発祥之地・同心學舎跡碑
(現・熊本市中央区下通1丁目10-10)「明治十二年十二月熊本區高田原相撲町十二番地のこの地に佐々友房先生他有志によって同心學舎が創立され現在の濟々鬻の淵源となつた」(碑文)

にした教育によって、「皇室之干城、国家之柱石」¹⁸となる国家有用の人材を育成することを建学の精神とした。自由民権運動が全国的に高揚する世相の中で、反民権の国権主義を標榜する熊本の濟々鬻は特異な存在であつた。以後の熊本の保守的精神風土を形成していく牙城ともなつた。

一八八二（明治一五）年、私立濟々鬻が開校した翌月の三月、紫溟雜誌社が『紫溟雜誌』を創刊し、同年八月には、紫溟新報社が機関新聞『紫溟新報』を創刊し、言論・情宣の分野でも攻勢に転じた。その後『紫溟新報』は、一八八八（明治二一）年一〇月『九州日日新聞』と改題発行され、明治二三年には佐々友房が第三代社長に就任し陣容刷新を行なつた。この『九州日日新聞』と政友会系の『九州新

聞』を合併した『熊本日日新聞』が、一九四二（昭和一九）年に創刊されることになる。²⁰

一八八二（明治一五）年二月四日、宮川貞衛が熊本区相撲町三三に設立した私立済々黌は、明治二一年に県立熊本中学校が廃校となると県立代用の形となった。既に「明治二十年十月尋常中学校の組織に改め私立済々黌、同月九日、文部省告示第十一号を以て、徴兵令第十三条によって、官立同等の学校と認定されて徴兵猶予の特典を与えられて」いた。²¹

同年の一八九一（明治二四）年一〇月一六日には国権派の私立済々黌、熊本文学館、私立春雨黌、私立熊本法律学校の四校が合併して、私立「九州学院」を創設した。これは、一九一一（明治四四）年開校の私立「九州学院」（現・学校法人九州学院）とは全く別物の学校である。

熊本文学館は明治二二年四月一九日、熊本市内坪井町一一〇高橋諒一宅に館長・津田静一が設立した。教養の目的に、「英漢ノ二学科ヲ教授シ文科専修ノ者ヲ養成ス」とある。²²

私立春雨黌は明治二一年一月三〇日、熊本区山崎町三〇番地春雨社内に総代・高岡元眞が設立した私立の医学学校である。

私立熊本法律学校は明治二二年二月一五日、熊本区上林町五八番地に有吉立愛が設立した。教養の目

的に、「法律学研究志願ノ者ヲ入学セシメ法律大綱ノ研究実施応用ノ練習ヲ養成スルヲ以テ目的トス」とある。²³

熊本市南千反畑三八番地に設立された私立「九州学院」は「九州学院設立願」によると、生徒総数が男子一一五〇人、内、普通学部五〇〇人（元・済々黌）、医学部二〇〇人（元・春雨黌）、法学部三〇〇人（元・熊本法律学校）、文学部一五〇人（元・熊本文学館）、職員六〇人ほどの、全国的にも大規模の大私学となった。院長に男爵松井敏之、旧校長が幹事に就き、各部には部長を置いた。評議員の会頭に子爵・長岡護美、評議員の中に佐々友房がいた。

明治二五年八月には私立選修学校を付属させ九州学院予備門とし、同二六年には各四部及び予備門を合同するため市内藪之内町旧師範学校跡に校舎を、内坪井町に寄宿舎を建築して移転。しかし寄り合い所帯だったため、明治二七年三月には普通部が分離して熊本県尋常中学済々黌となり、同年五月には松井敏之が九州学院長を辞したため、済々黌長・八重野範三郎が九州学院長を兼任した。同年三月一四日に熊本英学校が奥村問題で分裂し、九州私学校と改称していたのと時機を同じくしている。

明治二八年三月には、陸海軍学校への入学志願者のために北千反畑の私立緯武黌を合併して、九州学

院付属緯武黌と称した。同年に法学部が、翌二九年に医学部が経営困難に陥り廃止となり、医学部長・高岡元眞は同年九月七日、九州学院内に私立熊本医学校を新たに設立した。同校は明治三七年一月五日に開校された私立熊本医学専門学校へと発展した。明治二九年には九州私学校（熊本英学校）も廃校となった。九州学院の中で文学部のみ存続していたが、明治三〇年三月二四日、これも経済上の理由で廃院となった。

唯一存続し続けた熊本県尋常中学済々黌は、一九〇〇（明治三三）年二月一日、県費支弁の中学となり、第一済々黌を熊本県立中学済々黌、第二済々黌を熊本県立熊本中学校と改称したのである。

（ふじもと まこと）九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長

【注】

（1）同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究・日本プロテスタンティズムの一流流と展開』（昭和四〇年八月一五日発行、みすず書房）・杉井六郎「熊本洋学校」九六～九七頁。

（2）山田武甫とともに横井小楠門下の四天王および三秀才の一人と言われた実学党の領袖。熊本県少参事、大参事心得として肥後の維新を推進した。緑川製糸場や紅茶不

知火会社社長、広取学校校長、県会議長、衆議院議員（熊本県第一区）となり、自由党・憲政党に属し活躍した。（鈴木喬編著『熊本の人物―熊本の風土とこころ第三集―25』昭和五七年一月二〇日発行、熊本日日新聞社）一六四頁。

（3）横井小楠門下の秀才、実学党の領袖。熊本藩少参事として肥後の維新を推進し、廃藩置県後も県参事として県政の改革を行なった。敦賀県令を経て、熊本で共立学舎を創設し、県の師範学校長となった。また蚕業会社を興し、実業界でも活躍した。公議政党、九州改進黨の幹部として民権運動の中心的役割を果たした。第一回衆議院議員（熊本県第五区）となり、第三回帝国議会では議長候補となった（『熊本の人物』同前一六二頁）。

（4）熊本県教育会編『熊本県教育史・上巻』五三四頁。

（5）（1）の一四九頁。

（6）洋学校に明治六年九月入学の第三回生で、広取学校、熊本中学、大江義塾教師。済々黌教諭。熊本中学校教頭。尚綱高等女学校校長。（田中啓介編『熊本英学史』・昭和六〇年九月二五日発行、本邦書籍、一一九頁）。ジェーンズから福島綱雄に授与された『聖書』が九州学院に所蔵されている。

（7）（4）の四八七～四八八頁。

（8）新熊本市史編纂委員会編『新熊本市 資料編 第六巻 近代Ⅰ』（一九九七年三月三〇日発行、熊本市）八六七～八六九頁。

- (9) (4) の四八九〜四九一頁。
- (10) (1) の一四九頁。一五〇頁には、この教育課程を图表にしたものが掲載されている。
- (11) (1) の一五二〜一五三頁。
- (12) (4) の四九四頁。
- (13) (4) の四九四〜四九七頁。
- (14) 所在地・八代郡鏡町一八九、設立者・岡田松生（熊本洋学校三回生）、明治一五年八月一日設置、明治一六年一〇月二一日鏡池英学校と改称、明治一九年八月三日廃止。遠山参良と共に同志社英学校に進学した内田康哉も遠山参良と共に学んでいる。内田康哉は遠山参良と同郷で一歳年長の親友である。後に東京帝大法科卒業後、外務省に入り、大使として欧米やロシアに駐在。外務大臣や南満州鉄道総裁、枢密顧問官、貴族院議員を歴任した。
- (15) 植木町に広田尚（横井小楠門弟）らによって設立された熊本県最初の自由民権派の学校。平川惟一、宮崎八郎らを指導者とし、民権運動の拠点となり政治結社の性格が色濃くなったため、明治八年一〇月には県から閉鎖を命じられた。教科書には『文明史』『万国史』『万国公報』『万国精理』（モンテスキュー）、『自由之理』（ミル）、『民約論』（ルソー）、福沢諭吉の著書、聖書などを使い、特に『民約論』（中江兆民塾に学んだ宮崎八郎がもたらしたもの）は中心の経典となっていた（『図説・熊本の歴史』一九九七年一月一〇日発行、河出書房新社、一七四〜一七五頁）。
- (16) (一八五四〜一九〇六年)号は克堂。時習館で学び、西南戦争では池辺吉十郎を隊長とする熊本隊を結成し、その幹部として西郷軍に応じた。宮崎で投獄されたが、明治一三年病気のため赦免され帰郷。熊本市に同心学舎を興し、一五年には済々黻と改称。また紫涙会を組織し、二三年には国権党に発展した。国権主義、中正主義を主張して民権派と対立し、第一回総選挙に当選以来、衆議院議員を連続して務めた（『熊本県近代文化功労者』・岩下雄二「佐佐克堂」、昭和五六年二月二〇日、熊本県教育委員会、一一〇〜一一八頁）。
- (17) 森田誠一・花立三郎・猪飼隆明『熊本県の百年・県民百年史43』（一九八五年二月二〇日発行、山川出版）七〇〜七一頁。
- (18) 佐佐克堂先生遺稿刊行会『克堂佐佐先生遺稿』・「済々黻記」（明治一五年二月一日）（8）の八七五〜八七六頁。
- (19) 三綱領として、「一、正倫理、明大義。一、重廉耻、振元氣。一、磨知識、進文明。」が掲げられている。
- (20) 『熊日50年史』（平成四年一〇月一日発行、熊本日日新聞社）「第2編 熊日前史」より。
- (21) 『熊本県教育史 中巻』（昭和六年一月一〇日発行、熊本県教育会）二六九頁。
- (22) 同前三一七〜三一八頁。
- (23) 同前三一九〜三二二頁。
- (24) 同前三六八〜三八一頁。